

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語における情報伝達の方策--スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析--

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nomura, Mei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1847">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1847</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 博士論文

## スペイン語における情報伝達の方策

### —スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析—

#### 要旨

野村明衣

本論文は、スペイン語において円滑なコミュニケーションを実現するために、話し手がどのような付加的な言語形式を用いるかを、日本語の終助詞と対照することによって解明することを目的としている。日本語における終助詞は、それを付加することによって、話し手が発話をどういう構えで差し出そうとしているかを表現する「伝達態度」を表すものであり（滝浦 2008: 124）、「伝達態度のモダリティ（益岡 1991: 48）」とされている。これらの日本語終助詞に関する豊富な研究を利用して、スペイン語における「助詞機能」、すなわち話し手の態度を担う表現を記述し、その機能を明らかにすることを目的としている。

第1章では、日本語の終助詞について述べる。まず、陳（1987）の記述をもとに、口語に頻繁に現れる終助詞「よ」、「ね」、「さ」、「わ」、「ぞ」、「ぜ」、「か」のうち、「ね」と「よ」を対象とする理由を述べる。次に、「ね」、「よ」の基本的性質に関する先行研究を概観する。主に陳（1987）や益岡（1991）に代表される認識（知識）の一致・不一致説、田窪（1992）、金水（1993）による談話管理説、そして滝浦（2008）による従来の研究への指摘を挙げ、本論文では、スペイン語を「視点保持」型、日本語を「共通点模索」型とする太田（1992）に基づき、終助詞の選択に話し手と聞き手の存在を認める認識（知識）の一致・不一致説を中心にスペイン語と対照することを説明する。また、「ね」と「よ」の具体的な用法を挙げる。

第2章では、スペイン語のどのような表現が終助詞と対応する可能性があるかを説明する。考察の結果、Martín Zorraquino y Portolés（1999）がスペイン語における談話標識の中で「聞き手めあて表現（enfocadores de alteridad）」に分類している¿verdad?、¿no?、eh、呼びかけ語、sabe(s)、entiendes、ves、oye、mira、fíjate、verás、escucha、vamosを対象とする。また、スペイン映画20作品から収集したデータをもとに、文頭や文末などの位置による用例数や、共起する文の機能を分類した結果を提示する。

第3章では、¿verdad?と¿no?について考察する。¿verdad?は、話し手が発話

内容への確信度が高く、¿no?は確信度が低い場合に用いられる。また、¿verdad?は命令と共起しないのに対して、¿no?は共起可能であるという現象を指摘し、この理由として、語彙的には「真実」を意味する *verdad* が発話が真であることを前提に問い、否定の意味を持つ *no* は発話内容を否定する余地を残して問うという、異なる性質を持っていることを説明する。さらに、¿verdad?と¿no?は必ずしも聞き手の答えを求めないことを指摘し、¿verdad?は発話内容が真であることを確認する話し手の姿勢を表すもの、¿no?は聞き手が発話内容を否定する余地を残して確認する姿勢を表すものであり、疑問文の一種ではなく、話し手の発話内容に対する態度を示す形式であると主張する。これらの表現は、確認や共有を表す点において日本語の「ね」に対応する。しかし、¿verdad?と¿no?は発話内容への話し手の確信度を示すことによって確認や共有として機能するのに対して、「ね」は発話内容に関する聞き手の認識（知識）が、話し手と一致していること、あるいは話し手よりも上回っていることを示すものであり、本質的には異なる。そのため、行為指示に伴う場合など一部の用法については対応しないことを述べる。

第4章では、*eh* について論じる。*eh* は語彙的意味を持たないが、文頭では具体的意味を持たない音形を聞き手に向けることによって、ぞんざいな注意喚起となる。また文末では、先行発話に注意喚起し、上昇音調をとることによって聞き手に発話内容の確認や理解を求める。終助詞の「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）が一致していない、すなわち話し手の情報量が相対的に上である発話内容が聞き手に向けられていることを表明したり、発話内容の理解を求める。文頭で用いられると、それが持つ聞き手めあて性によってぞんざいさを感じさせる。このことから、どの位置においても *eh* は「よ」に対応すると主張する。しかし、感情表現（感謝、謝罪、あいさつなど）の場合、スペイン語では文末に *eh* がつくことができるが、日本語では「よ」はつかない。これは、感情表現の形式がスペイン語と日本語で異なっていることや、日本語では聞き手を意識して「ね」を用いるという類型的な差があることを説明する。

第5章では、呼びかけ語について考察する。聞き手を呼びかけるという行為は、滝浦（2008: 16）によると「声で聞き手に触れる」行為である。スペイン語ではこの方法を用いて聞き手との近さを示し、親密さや威圧感を感じさせたり、聞き手に接近して伝達することによって含意があることを表す場合もある。文頭では聞き手となる個人を特定し、注意を喚起する機能を持つが、文末では発話内容に対する話し手の態度を、様々な語彙を選択して表明する。呼びかけ語が主に言明や返答、命令に伴う場合は「よ」に、感謝や挨拶などに伴う場合には「ね」に対応する。しかし、言明に伴っていても話し手と聞き手の認識（知識）が一致していたり、聞き手の方が発話内容に関して情報量が多いと判断さ

れる場合には、「ね」に対応する。さらに、質問や挨拶の一部など終助詞に対応しない場合もある。これは、スペイン語の呼びかけ語は話し手と聞き手の関係を明示するものであるのに対して、終助詞は情報と聞き手との関係を表すものであり、根本的に異なることによる。

第6章では、**sabe(s)**、**entiendes**、**ves** について述べる。これらの表現は聞き手に理解を求めるものであるが、**sabe(s)**は聞き手に受け入れられるものと話し手が判断し、**entiendes** は聞き手にとって受け入れがたくても理解するよう求め、**ves** は先行発話と状況との一致の確認を通して理解を求める、といった異なるプロセスから働きかけようとする話し手の態度を表す。疑問形だけでなく肯定形でも用いられ、聞き手が当然理解するだろうという断定的な態度を示して理解を求める。さらに **sabe(s)**には上昇音調と下降音調による差も観察された。これらの表現は、文頭では注意喚起や話題維持を表明する点において「ね(え)」に、文末では発話内容への理解を求める点で「よ」に対応する。このことから、スペイン語では、聞き手の理解を求める場合にも語彙を積極的に使い分けることを主張する。

第7章では、**oye**、**mira**、**fíjate**、**verás** の機能の差異について論じる。**oye** は動詞の語彙的意味を残した無標の注意喚起であり、話題転換を示したり新規の情報を導くことができる。しかし、**mira** は脱意味化の度合いが高く、聞き手を理解に導こうとするものである。注意喚起の機能を持たないので談話の最初となる開始部で用いられず、先行発話に関わる発話内容へ聞き手の注視を促す。**fíjate** や **verás** も同様に注視の促しの機能を持つが、**fíjate** は語彙的意味の強さによって驚きの含意を持ち、それによって注視を促すものであり、脱意味化の度合いは低いと考えられる。また、**verás** は **mira** と同様に視覚表現で脱意味化の度合いが高く、未来形であることから聞き手が話し手の発話を通して自然に理解するだろうという含意を持つ。**oye** と **fíjate** は文末での使用も見られたが、これは脱意味化の度合いが低いことによると考えられる。文末では¿**verdad?**や¿**no?**、**sabe(s)**や **entiendes** といった語彙を積極的に使い分けて話し手の発話態度を示すので、語彙的意味がはっきり表れる位置であると考えられる。だからこそ、脱意味化の度合いが高い **mira** や **verás** は文末では現れないのである。これらの表現は、文頭では注意喚起や注視の促しの機能を持つ「ね(え)」に、文末では聞き手に注意喚起する「よ」に対応する。

第8章では、**vamos** について述べる。**vamos** は話し手の意見であることを強調的に表明するものであることを主張し、発話修正や話し手の意見を述べる場合に使用される。文末では話し手と聞き手の認識(知識)が一致していないことを示す「よ」に対応する。

第9章では、スペイン語の文頭と文末の表現を相互比較し、同じ機能を持つ

表現がそれぞれどのように異なるのかを振り返り、スペイン語母語話者に対して実施したアンケートの結果を分析し、文頭、文末の表現の機能を改めて検討する。スペイン語では、文頭に現れる表現は、聞き手をどのように情報へ導くかを表明する聞き手管理機能を持ち、文末では発話内容に対する話し手の発話態度を示すといった異なる機能を果たすことを主張する。

第 10 章では、これまで考察してきたスペイン語間投詞と日本語終助詞の機能の対応を振り返り、総合的な分析を行う。その結果、第 1 にスペイン語の間投詞は文頭と文末のそれぞれの位置で様々な語彙を使い分けるのに対して、日本語の「ね（え）」や「よ」は文頭で聞き手をどのように発話に導くかは重要ではなく、聞き手と情報との関係を表す「ね」と「よ」に様々な音調を変化させて伝達態度を表明すること、第 2 にスペイン語と日本語では聞き手を意識する度合いが異なり、スペイン語では話し手がどう伝えたいかを基準にして表現形式を選択するのに対して、日本語では「ね」や「よ」によって聞き手と情報の関係を表明するという、情報伝達時の特徴が窺えることを述べる。

第 11 章では、スペイン語と日本語の情報伝達時における方策について結論を述べる。第 1 に、情報伝達前の文頭と伝達後の文末の機能は大きく異なり、スペイン語の場合は、文頭ではどのような態度で伝達したいか、文末では話し手の発話態度の表明として表現形式を選択するが、日本語では、文頭では積極的に「ね（え）」や「よ」を使い分けることはないが、文末では聞き手と情報との関係を明示する「ね」や「よ」に音調を変化させて話し手の伝達態度を示すこと、第 2 にスペイン語では話し手がどう伝えたいかを基準にするのに対して、日本語では聞き手を中心とし、話し手と聞き手の認識（知識）が一致しているかどうかをことさら述べたり、聞き手との情報量を比べて言語形式を選択することを、結論として提示する。